

さいはての
(石川啄木)

さいはての
駅えきに
下り立おたち
雪ゆきあかり

さびしき
町まちに
あゆみ
入いりにき

解説 札幌から小樽日報の立ち上げで小樽に越いた。しかし、小樽日報の主筆の岩泉江東が独断で思うままに事を処理する態度に対抗し、啄木は社内粛正運動を起こし、江東の追放に成功したが、事務長の小林寅吉から暴力をふるわれたことを契機として退社。社長の白石義郎は啄木の才能を惜しみ、自身が経営する『釧路新聞』の入社を勧めた。啄木が釧路駅に着いた日は、雪が燦々と降る夜であった。

語釈 ※さいはて||これより先はないという端。※雪あかり||積もった雪の反射で、夜も周囲が薄明るく見えること。

通釈 北海道の最果ての地、釧路駅に降りると、夜なのに雪あかりで町の様子が見える。こんな寂しそうな地にととうとう来てしまった。